

新聞と学生～受講生アンケートから～

橋場義之

はじめに

筆者が本学新聞学科に赴任したのは2002年度からである。ここで受け持つことになった新聞論や報道論などの講義を始める際、いまの学生たちにとって日常の中でのメディアの実態を知りたいと思った。他の大学にはあまりない「新聞学科」をあえて選んできた学生はこの学科に何を期待しているのだろうか、新聞あるいはメディア全般について何を知らがっているのだろうか——とくに、筆者が新聞記者出身であることから、「新聞」へのこだわりは当然ながら強く、関心は「若者と新聞」へと集中したことは言うまでもない。そこで赴任当初から、以下説明するようなアンケートを受講生に実施することにし、07年度まで継続的に行ってきた。もちろん、このような動機で始まったアンケートであるから、学術的な目的に必ずしも合致する精緻さを満たしているものでない。そうではあるものの、継続的に収集したデータは、少なくとも最近の学生のメディア状況を知る手がかりとして利用できるのではないかと考え、6年間のアンケートを分析してみることにした。

1. アンケートの内容

アンケートは、筆者が担当する「新聞論」と「報道論」の年度当初の第1回目講義に参加した学生に実施した。第1回目の講義は授業のオリエンテーションを内容としており、アンケートに回答したすべての学生が、第2回目講義までに正式な受講登録をしているわけではない。また、両講義は新聞学科では2年時生以上の「選択科目」とされ、かつ他学科生にも受講が開放されているものである。従って、両講義とも受講生は新聞学科2年次生が中心だが、中には3、4年生も一部含まれており、同時に新聞などに興味をもつ他学科生もいることを事前に断っておく。

本アンケートに答えてくれた受講生の人数は次の通りである（カッコ内は新聞学科生）。02年度：116人（54人）、03年度：158人（59人）、04年度：106人（29人）、05年度：162人（111人）、06年度：146人（97人）、07年度：147

橋場義之

人（102人）

なお、02年度から04年度までは、アンケートを実施する際に、両講義を同年度に受講している学生がいることを考慮せず、一律に両講義受講生を対象に実施しているため、ダブリ回答が含まれている。05年度からはこのことに気づいて、ダブリ受講生には、どちらかの講義で回答するよう指導している。また、両講義は「2年生以上」のためのものだが、2年生が同じ年度に両方の講義を受講するケースと2年度にわたってひとつずつ受講するケースがある。しかし、アンケートは学年を無視して全受講生を対象にしているため、一人の学生が2年度にわたってアンケートに回答していることもある。

このようなアンケートの実施方法なので、実数データには厳密性が欠ける結果となっている。このため、データは「実数」よりも「割合」を重視し、一般的な傾向を大づかみに読み取る一助としたい。

アンケートの目的は以上のように「新聞と学生」の関係を知ることにあるので、以下のような質問をしている。

- Q.1 ふだん、どんなメディアを通じてニュースに触れていますか？
- Q.2 あなたがふだん読む新聞の種類と名称はなんですか？
- Q.3 あなたは、どんな形で新聞に触れていますか？
- Q.4 あなたは新聞をどの程度読みますか？
- Q.5 あなたが新聞を読む目的はなんですか？
- Q.6 あなたはメディア業界への就職を希望していますか？
- Q.7 あなたはパソコンを持っていますか？
- Q.8 あなたは携帯電話を持っていますか？

なお、Q.7とQ.8については、06年度まで行った結果、回答の90%以上が「はい」であり、受講生にとってパソコン・携帯電話はもはや大多数に普及しているツールであることは明白であった。このため、07年度からは質問項目から削除しており、本稿でもこの項目については触れないことにする。

2. アンケート分析

Q.1 ふだん、どんなメディアを通じてニュースに触れていますか？

受講生たちは日ごろ、ニュースをどのメディアを通じて入手しているのだろうか？

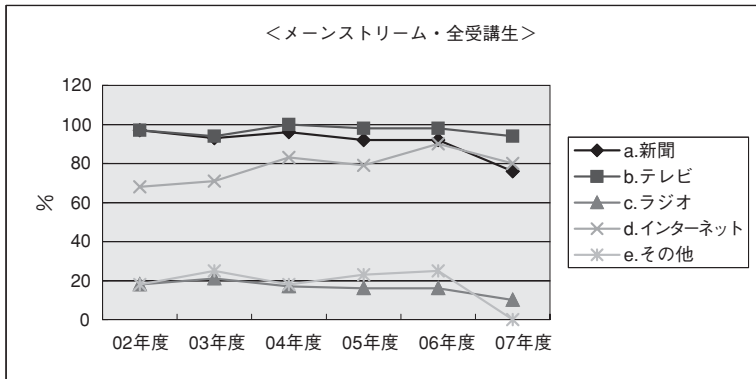
学生たちにとっての「メインストリーム・メディア」が何かを探るのが目

的である。複数回答の結果を、表1aでは全受講生、表1bでそのうちの新聞学科生、表1cで他学科生について時系列に沿って示している。

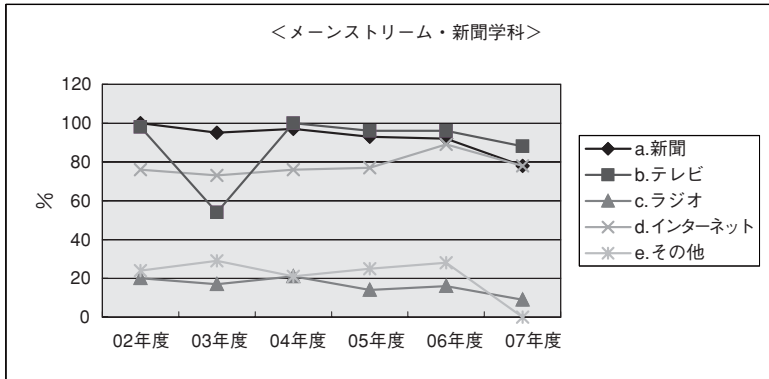
まず、全体傾向をみると、どの年度でも95%以上の学生がテレビを利用しており、学生たちが最も利用しているのはテレビであることが分かる。伝統的メディアである新聞については、漸減傾向を示している。調査開始時点と比較すれば、20ポイントも低下しており、学生たちの「新聞離れ」が見て取れる。逆にインターネットについては、同様の比較をすれば12ポイント増であり、漸増傾向といえるだろう。

新聞学科生でみると、どのメディア利用も減る傾向にあることが気になる点である。テレビ、新聞が上位であることに変わりはないものの、減少しているようにみえる。インターネットは調査開始時点では他学科生より利用度が高く、80%近くを占めていたものの、その割合はその後増える傾向にあるというわけではなく、毎年ほぼ同じレベルで推移している。同様に、他学科生よりも利用度の高かった「その他」もここへきて急落している。「その他」のメディアが何を指すのかについての回答は求めているが、雑誌類が含まれると思われる。なかでも、近年は「R25」の普及が学生間に観察されるが、もし仮にこの回答が「R25」だとすれば、そろそろ「あき」が出始めたともみられることも出来るかもしれない。いずれにせよ、新聞学科生では、トータルとしてのメディア接触そのものが減少傾向にあるように見受けられる。今後の推移を見守る必要があるが、この傾向が続くようであれば、学科教育上も重要な課題となる可能性を否定できないだろう。

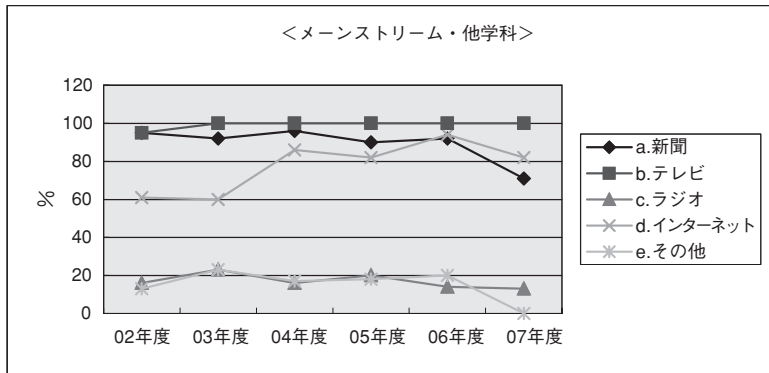
<表1a メーンストリーム・全受講生> (%)



＜表 1 b メーンストリーム(新聞学科生)＞ (％)



＜表 1 c メーンストリーム・他学科生における割合＞ (％)



Q.2 あなたがふだん読む新聞の種類と名称はなんですか？

では、受講生たちはニュースメディアの中でも「新聞」をどのように利用しているのか？ まず、購読状況を把握するために、質問したのがQ.2である。表 2 aは受講生全体、表 2 bはそのうちの新聞学科生のみ、表 2 cは他学科生の回答を示している。

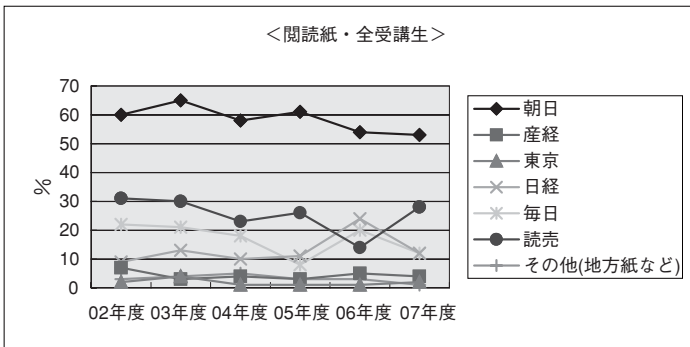
まず全体的に見ると、全国紙が上位を占めている。これは本学の学生の居住地が東京・千葉・埼玉・神奈川に集中していることからみれば、有力地方紙が存在しない首都圏状況を反映した当然の結果であろう。

最も読まれているのは学科を問わず、朝日であった。占有率は他紙の2～3倍で、ほぼ6割前後という“ダントツ”の位置で毎年推移している。もっとも、経年変化をみれば朝日といえども漸減傾向にあることは否めない。

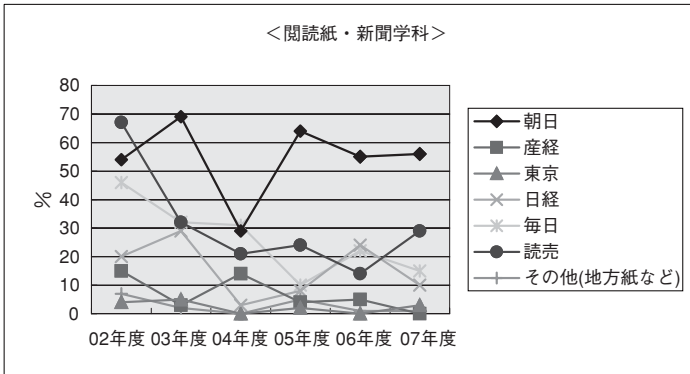
05年度までは第2位が読売、第3位が毎日という構図が続いていたが、06年度からは日経が毎日を追い越して第3位に浮上し、07年度では毎日と3位タイの位置につけている。最近の日経の存在感の高まりが学生たちにも浸透しているといえよう。

一方、新聞学科生でみると、全体傾向と大きな違いは見受けられないが、毎年の占有率が極端に変化していることが目に付く。逆に他学科生では、朝日と他紙との開きがかなり大きいのが特徴だが、その中では日経が漸増傾向を続け、04年度以降2位として成長してきたことが目立つ（ただし、07年度の急落に意味があるかどうかは不明だ）。

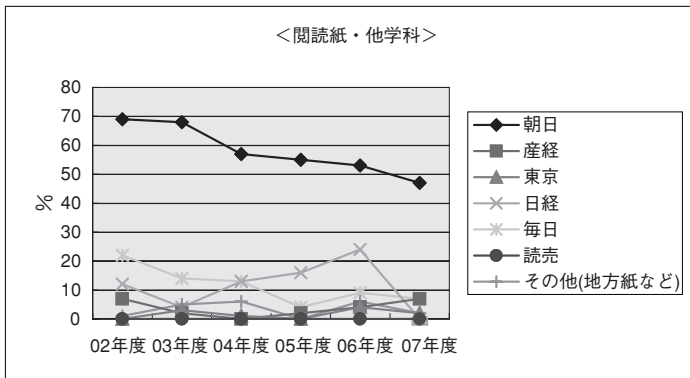
<表 2 a 購読紙・全受講生> (%)



<表 2 b 購読紙・新聞学科生> (%)



<表 2 c 購読紙・他学科生> (%)



Q.3 あなたは、どんな形で新聞に触れていますか？

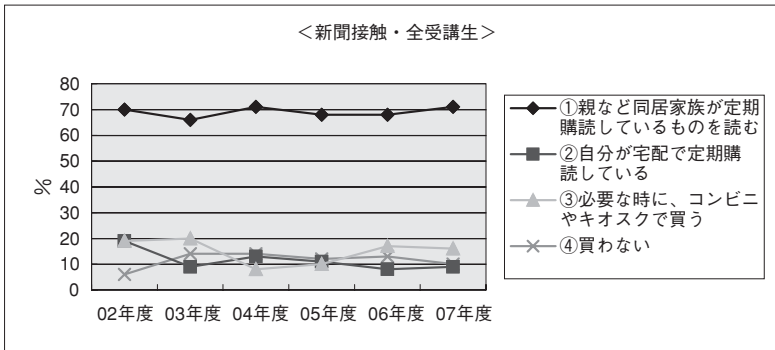
学生たちが日頃、新聞をどのように手にしているのかを聞いたものである。以下、3つの回答表は前項と同様。

全体をみれば、①「親など同居家族が定期購読」している新聞を利用して読んでいる、というのが最も多く、約7割を占めている。本学では首都圏の高校出身者が多いため親など家族と同居している学生が多く占めていることから予想通り当然の結果であろう。

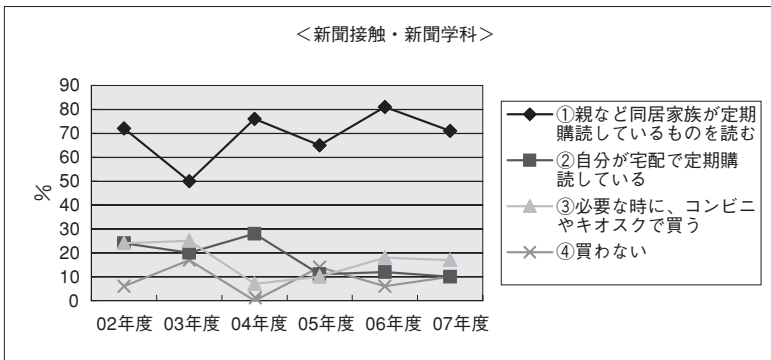
問題は「買わない」という回答である。回答の選択肢として妥当だったか、

今にして思えば若干疑問である。この回答では、「どんな方法でも新聞に触れない」ことを直接的に意味していないからである。そうではあるもの、質問の趣旨を学生が理解してくれた上での回答だとするならば、新聞学科生ですら「買わない」が年度によって数%から10数%、他学科生では10数%から時には30%に上ることもあることは驚きである。ここにも、学生の新聞離れを見て取れる。「買う」という行動が新聞と結びつかないのは、近年普及しているフリーペーパーの影響を考慮せざるを得ないだろう。(実際に学生たちがどの程度新聞を読んでいるかは、次のQ.4で聞いている)

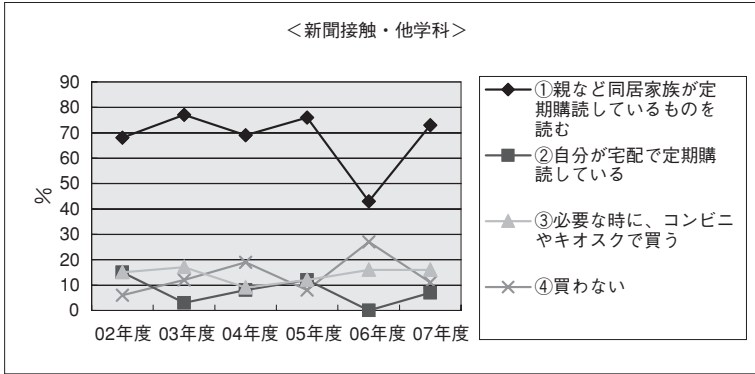
<表 3a 新聞入手方法・全受講生> (%)



<表 3b 新聞入手方法・新聞学科生> (%)



<表 3c 新聞入手方法・他学科生> (%)



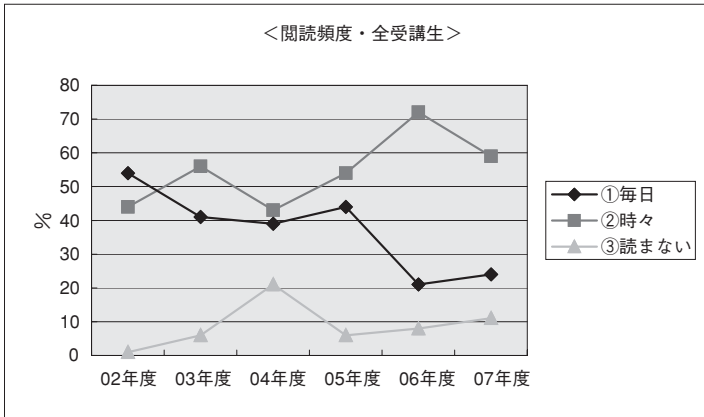
Q.4 あなたは新聞をどの程度読みますか？

それでは、学生たちは日頃、どの程度新聞を読んでいるのだろうか？ 回答をまとめた以下の表4 a、b、cである。表4 d、e、fは、「時々」と答えた学生にさらに具体的に聞いた結果である。

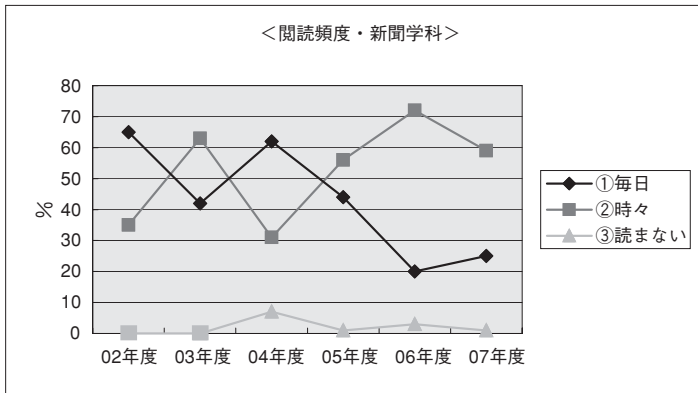
まず、全体としては、「毎日（週に7日）」という回答は02年度のみ第1位であったが、03年度から第2位となり、その後も減少傾向が続いている。これに反比例するように「時々」と「読まない」が増え続けている。これは他学科生でもほぼ同じような傾向として現れている。

新聞学科生でみると、04年度までの3年間は「毎日」と「時々」の回答が第1位と第2位を年度ごとに入れ替わっているが、05年度からは「時々」が「毎日」を追い抜き、それ以降この状態が続いている。「読まない」が他学科生で急増していることと比べて、新聞学科生でほとんどいないのは救われる思いである。

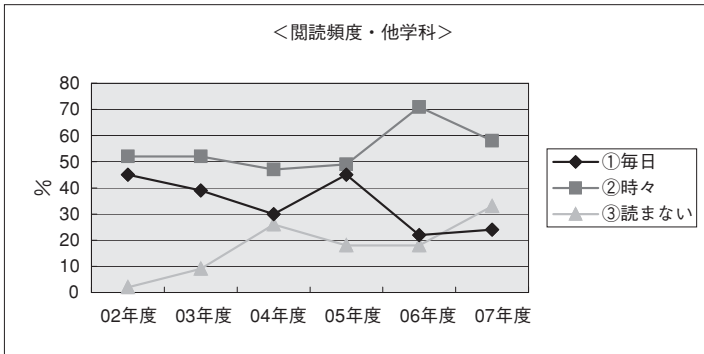
<表 4 a 新聞閲読状況・全受講生> (%)



<表 4 b 新聞閲読状況・新聞学科> (%)



<表 4c 新聞閲読状況・他学科> (%)



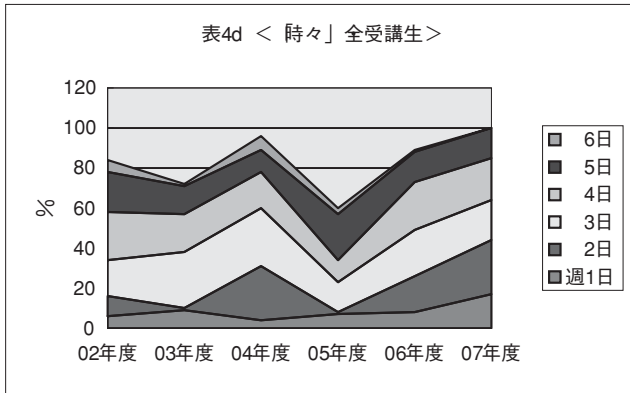
次に「時々」の実態をもう少し踏み込んで聞いてみた結果が、以下表 4 d、e、fである（%は、「時々」の内数）。

まず全体傾向をみると、「週 3, 4, 5 日」といういわば中間層に大きな変化はみられないが、「1 日」と「2 日」の急増ぶりが目立つ。このため、「1 日」「2 日」「3 日」という、いわば「週の半分は読まない」層として括ると、02年度34%、03年度38%、04年度60%、05年度23%、そして06年度49%、07年度64%である。全体として増加傾向を読み取ることができるうえ、この2年は半数を占めるようになっていることが特徴である。

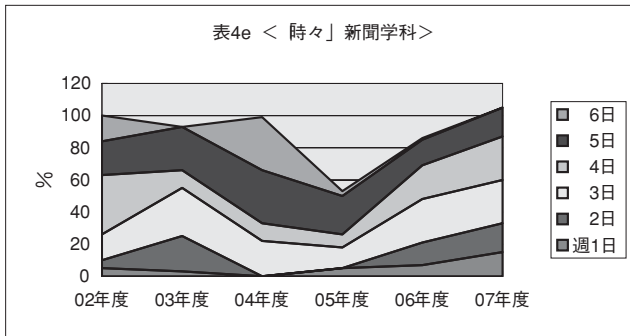
このことの裏返しとして、もともと少なかった「6 日」はこの2年ではほぼなくなった。

新聞学科生ではさすがに、「3 日」を中心に「4 日」「5 日」もかなりの数が見られる。

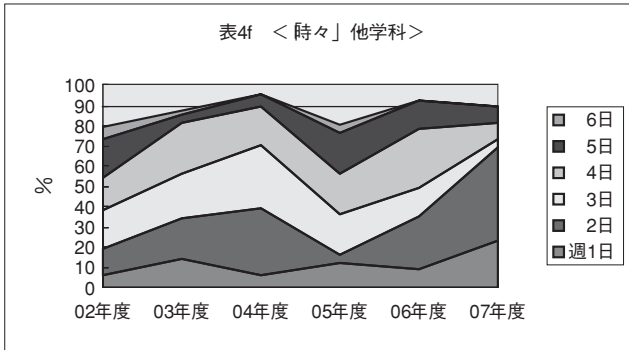
<表 4 d 時々読む・全受講生> (%)



<表 4 e 時々読む・新聞学科生> (%)



<表 4 f 時々読む・他学科生> (%)

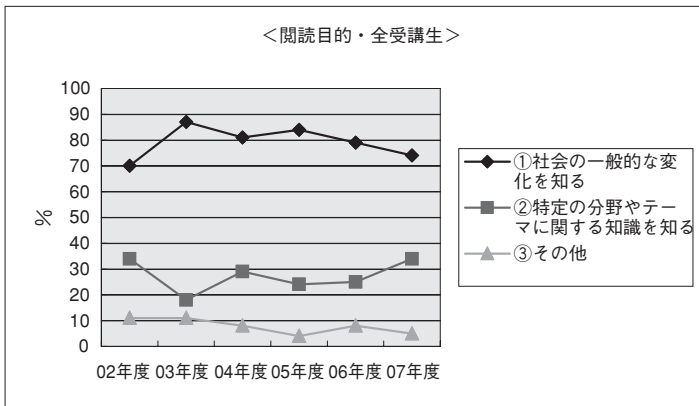


Q.5 あなたが新聞を読む目的はなんですか？

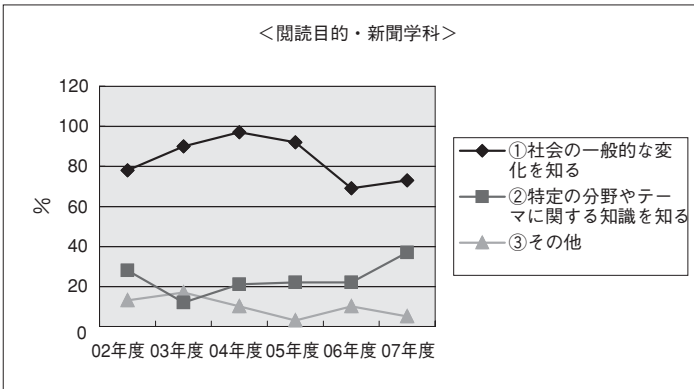
さて、以上のような新聞の接触状況の中で、学生たちは何のために新聞を読んでいるのだろうか。その結果（複数回答）が以下の表 5 a、b、c で示されている。

結果は、①「社会の一般的な変化を知る」が7、8割と大多数を占めていて、②「特定の分野やテーマに関する知識を知る」もほぼ3割弱という傾向は変わらない。学科による差異もほぼないように見えるが、あえて指摘すれば新聞学科生の目的が、「一般的变化を知る」から「特定の知識を知る」に移行しつつある兆候とみることができそうだ。

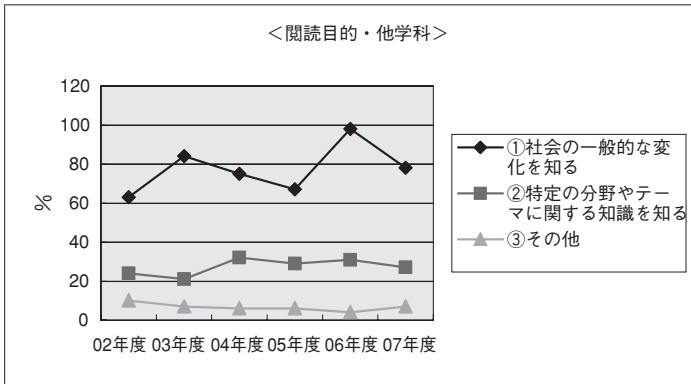
<表 5 a 閲読目的・全受講生> (%)



<表 5 b 読読目的・新聞学科> (%)



<表 5 c 読読目的・他学科生> (%)



Q.6 あなたはメディア業界への就職を希望していますか？

「新聞論」「報道論」を受講する学生たちは、将来の仕事をどのように考えているのだろうか。アンケート対象が主に新2年生であることを考慮しながら、以下の回答結果（表6 a、b、c）をみていこう。

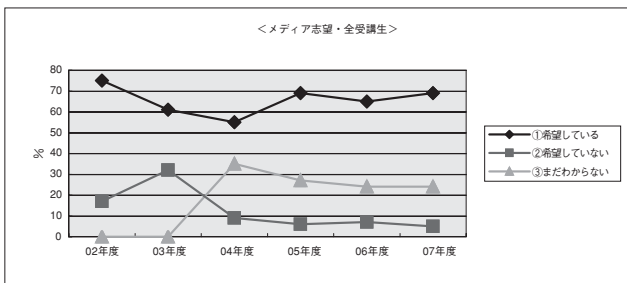
全体としては、①「(メディア業界への就職を) 希望している」受講生は減少してきたが、04年度の55%で底を打ち、それ以降はやや増えて65～70%の間で推移している。「報道論」「新聞論」が職業に結びやすい講義内容であることから、メディア業界への就職を比較的早い段階から意識している学生

橋場義之

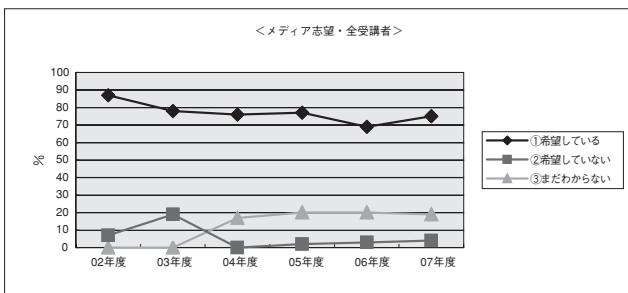
が受講しているとみることができよう。このことは、逆に「まだ分からない」という回答をみても確認できる。すなわち、新聞学科生の場合は「分からない」層は他学科と比べれば少なく、ほぼ20%で変わらないが、他学科生の「分からない」層は40%台から30%台に減少しているからだ。

もっとも、「希望している」受講生を学科別にみると、増加しているのは他学科生であり、新聞学科生ではむしろやや減少気味なのが気になるところだ。

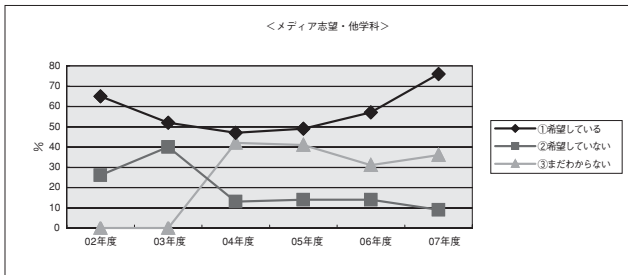
<表 6 a 就職希望・全受講生> (%)



<表 6 b 就職希望・新聞学科生> (%)



<表 6c 就職希望・他学科生> (%)



では、メディア業界への就職を「希望している」と答えた学生は、実際にどのようなメディアを目指しているのだろうか。具体的な業界を聞いたのが以下の表 6d、e、fだ。表の％はそれぞれ、全志望者、新聞学科の志望者、他学科の志望者を母数にした割合である。また、回答項の「広告」は、07年度アンケートで追加した。本アンケートは筆者の経歴上、ジャーナリズム＝報道＝を行う業界を回答項目に挙げていたが、その後、ゼミなどを通して学生たちの生の声を聞いていると、学生たちの「メディア業界」のイメージの中には、「広告業界」も強く認識され、かつ興味を強くもっているものが予想以上に多いことを知ったからである。

全体傾向をしてみると、02年度を除いて「放送」「出版」業界が1、2位を占めていることに変わりはないが、ここ2年では「出版」が学生たちの第1の人気業種となってきたことが分かる。これは、新聞学科生と他学科生に共通して見られる傾向といえる。「本を読まない」「活字離れ」といわれる学生たちが、なぜ「出版」なのか？ 実際に学生たちの声を聞く限りでは、興味をもって自ら携わりたいのは出版の中でも「雑誌作り」であり、その雑誌もジャーナリズム系ではなく、ファッション系雑誌や男性・女性誌、あるいはカタログ誌にあるようだ。これは本学科における毎年の卒論のテーマ選びをみていてもうなづけることではないだろうか。

新聞業界の人気は、03年度以降に大きな変化はなく、新聞学科生で25～30％、他学科生はこれよりやや低いレベルで推移している。

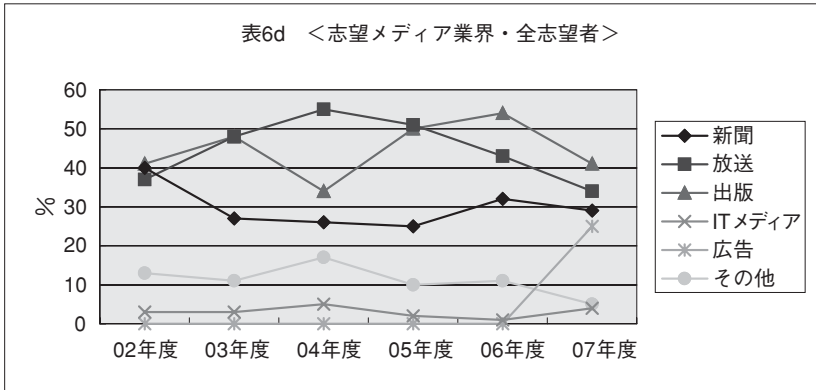
「広告」については、07年度のみを集計だが、06年度以前で「その他」と回答したかなりの部分が、これに相当していたのではないかと推測される。IT業界の人気は、ネット時代といわれる中で意外な結果といえるだ

橋場義之

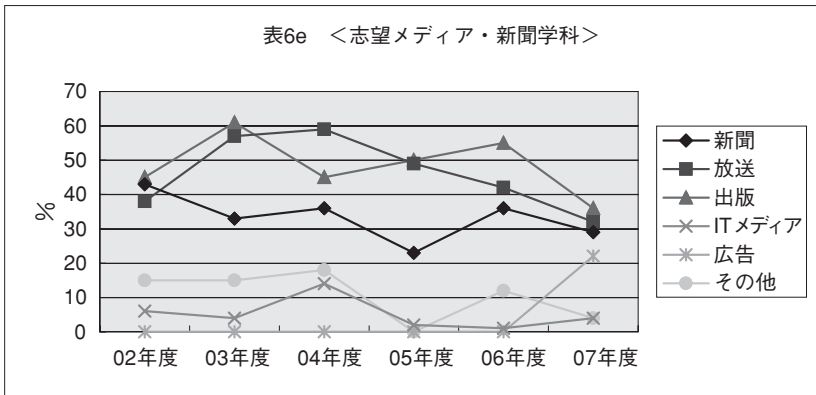
ろう。IT業界は、技術系のイメージが強いためか、あるいは新興ベンチャー企業が多く「安定性」に欠けると学生に判断されているためかも知れない。

<表 6d 「志望している」業種別内訳・全志望生> (%)

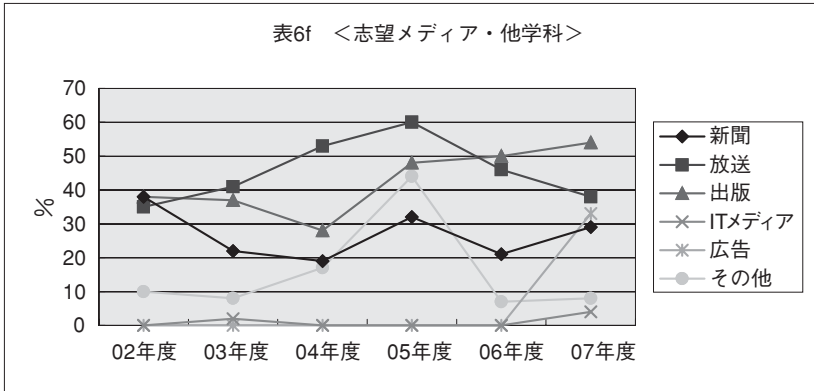
※06年度以前は「広告」の選択肢なし



<表 6e 「志望している」業種別内訳・新聞学科> (%)



<表 6f 「志望している」業種別内訳・他学科> (%)



3. まとめに代えて

以上、雑駁のそしりは免れないが、受講生とメディアの関係のみてきた。結論を述べるまでにはいかないが、ある程度の傾向を見て取ることができたのではないだろうか。

すなわち、2年生を中心とした本学科生は

1. そのほとんどが、ニュースを知るためのメディアとしてテレビ、新聞を利用しているが、ともにやや減少気味である。約8割はインターネットも利用している。
2. その約9割が朝日・読売・毎日の大手全国紙を通じてニュースを得ている。中でも朝日は約6割、他の2倍以上を占有しており、トップの座をほぼ毎年獲得している。
3. そのほとんどが、程度の差はあれ新聞を読んでいる、「(まったく)読まない」が急増している他学科とは対照的である。しかし、「週6日」はほとんどいなくなりつつあり、「週1日」も急増している。
4. その約8割が、卒業後の就職先としてメディア業界を挙げており、うち約半数は出版・放送業界を希望している。新聞希望は約30%である。広告希望が20%前後いることは、報道＝ジャーナリズムを希望する学生ばかりではないことを示している。

以上のように浮かび上がった本学科生の姿をどう評価するかはなかなか難しい。例えば、東大大学院情報学環の林香里准教授は『新聞研究』2007年12月号で、「首都圏の私立大学のメディア学科では、53人の学生のうち38人が、新聞を取っていないか、両親が取っていても読む習慣がないと答えている」と指摘している。これと比較すれば、本学科生はまだまだ新聞を読んでいる方だといえそうだ。とはいえ、そうした実態は今後どう変化するのか、ますます新聞を読まなくなっていくとすれば、そうした学生たちに対して、もっと読ませる教育上の工夫をするべきなのか、それともそうした実態に合わせて教育内容も変更していくべきなのか。今後の本学科の教育方向をどのように定めていけばいいのかを考える上でも、新聞学科生の姿を正確に捉えておくべきだし、そのためには、もっと精緻なアンケート設計や入学時と卒業時に悉皆調査を実施するなど実施時期・方法の検討が必要ではないかと考える。

なお、本アンケートのデータ処理は、筆者のゼミ生で07年度卒業の平澤祐君が担当してくれた。卒業間近の公私共に多忙な中で引き受けてくれた平澤君の労苦に感謝したい。